

文 型・文 法 7

長谷川 守寿

Grammar 7

HASEGAWA Morihisa

「文型・文法7」今年度初めて担当したクラスで、いろいろ試行錯誤している状態であるが、この授業について、報告する。

このクラスの目標は、「～次第で」「～につけ」など、日本語の助詞相当句を理解し、表現できるようになることである。それらを場面や文脈の中で、適切に使用する能力を身につけ、「こういうふうになりたい」と思う時、どんな表現があり、場面に応じてどれを使ったらいいかを理解することである。さらに、履修学生は文型5・6でボイス・アスペクト・テンスなどある文法事項を中心したコースを終えた学生のみであるため、これらに関する誤りを自らの力で直し、文型5・6の復習をすることも目標の一つと考えている。

テキストは『どんな時どう使う日本語表現文型500』（友松悦子・宮本淳・和栗雅子著 アルク1997年）で、対象となっている表現は、「日本語能力試験」1・2級の範囲に含まれるものである。1時間で1課進めるペースであるが、前回のフィードバックが4割・新規の解説が6割というところである。1課には、10ぐらいのイディオムや文型が含まれる。

授業の進め方としては、まず前回の授業の復習を行い、前回の宿題で目立った間違いをみんなで修正したり、宿題から拾ったいい例文を読んでもらう。その後、新しい課に入る。テキストには、表現の解説の前に、「知っていますか」「使えますか」という、理解を前もってチェックする部分があり、解説のあとに練習問題がある。ここを終えたあと、出来が悪かったり、いろいろ質問が出て来た表現を宿題に選んで、終了となる。

毎回文を作る宿題を出すので、学生は次の授業までにEメールで提出する（長谷川が担当する以前も、文型7ではEメールで宿題提出という形態を取っていたので、この方法を採用している）。実際には、表現を3つ指定し、それぞれを使って2文ずつ文を作ってもらう。つまり1回の宿題で6文書くことになるが、こちらでは、それを添削して返信している。以下、返信メールの例である。

添削法は、学生の文の下に正しい文を書いているが、語句の修正で済むものには、語句だけ、問題ない文に関してはokと答えている。（なお、本文の学生の例文は、使用に関して本人の許諾を得ているものである）

@@@@@@ @@@@ wrote: (一部略)

- > 1. 論文であれ日本語の勉強であれ、最近はあまり進めなくて苦しいんだ。
論文であれ日本語の勉強であれ、最近はあまり進まなくて苦しいんだ。
- > 2. 4泊5日だけの九州への旅行を計画しているが、別府やら阿蘇山やら、
九州には行ってみたい場所がいっぱいあって、なかなか決められないんだ。
「4泊5日だけ」→「4泊5日で」
- > 3. 今週の休日は日光に行くなり筑波山に行くなり秋の紅葉がたっぷり
感じられる所に行きたいな。

ok

1学期終了後学生にアンケートを取ったところ、1回の宿題が少ないという答え(15人中4名)もあったが、概ね学生には適正な数ようである。受講人数を考えると、6文というのは正直なところ、メールで送られてくる宿題を添削して返信をする教師の側には限界の数字である。

宿題のチェックをしたあと、授業の際のフィードバックの資料を作成する。宿題の結果、間違いが多かった表現に関して、もう一度説明したり、常に見られる助詞・ボイス・スタイル選択などの誤りを含む文を示し、修正する力を養おうということも狙いとしてある。文法的な誤りを自分の力で直せる能力も求めており、実際に試験でも修正の問題を出題している。また、作文に書かれてきた例文で、(1)のように受講者全員に覚えて欲しいような例文は、「覚えましょう」という項目にあげ、実際に試験にも一部改変して出題している。

(1)過去問題と入試準備の資料などは、返してくれなくていいですよ。後輩にあげるなり何なり好きにしてください。

メールで送られてくるため、修正の手間がかからず楽だろうと思ったが、(2)のように実際に書いてくる内容は学生の研究分野や知識的背景を反映したもので、それらを考慮して添削しなければならない。

(2)"Political correctness"という表現は人は性別や人種や年齢などを問わず社会における均等の機会や平等の処遇をうけるべきだという概念を表す。

作ってもらう時は、自分のことや自分の興味・関心のあることをテーマにして、なるべく長めの文(授業では、30~40字を目安)を書いてもらうことにしている。その表現だけを使うことは出来ても、文脈をつけられない事が多いためである。同様に、最終試験も、短い文(目安は30文字以下)は減点の対象としている。ここで学んだ表現を、小論文やレポートなどで、実際にスタイルに配慮しいろいろな文書で使えるようにするためである。以下に、宿題として提出された

学生の興味に関する例文で、フィードバックの資料にもなった例を(3)(4)に挙げる。

- (3)一つの定義として、例えば研究機関や研究家が美術的・芸術的であると決めたものだけがメインカルチャー、それ以外はサブカルチャーであるという分け方がある。こうした定義に基づいて、日本漫画はメインカルチャーか、サブカルかを考える。
- (4)二年間しか勉強していないにしては彼は日本語が上手だ。そして外国人にしては日本事情も詳しい。先生にしたらクラスにはそういう立派な学生がいるのはうれしいだろうが、同級生にしたら、そんなに能力の高い人とずっと比べられていることで劣等感を感じてしまう。
(下線部は、指示した表現)

宿題を携帯電話から送信してくる学生もいたが、携帯電話のメールの記憶容量の制限で返信してもすぐ削除されてしまうのか、最終テストをチェックした結果、同じ様な間違いをしていることが多かった。これでは、フィードバックの効果が見られないので、二学期からは携帯電話からの送信は、一応禁じており、今学期は全員パソコンからのメールである。これは大学のように、学生が図書館や研究室で常にコンピュータを使用していることから可能になる形態であろう。

しかし、Eメールを使用しているのも、メールサーバーの停止や、文字化けに悩まされることもある。特に、最初の1・2回は必ず文字化けに悩まされ、メールサーバーの相性の問題か、いくつかのアドレスからは、必ず文字化けが起こる。こちらもいろいろ手を尽くすが、どうしても読めずに、学生に再送の手間をかけてしまうこともある。始めのうちは、メールで提出する目新しさに興味を持って取り組むようであるが、学期を通じた学生への負担を考えた場合、通常の紙で提出する宿題がいいのか、現在の形式でいいのか、さらに調べていく必要がある。

他にも問題がある。メールだと宿題の文が正確に書けてしまうということである。メールで送られてくる宿題では全く見られなかったような、活用に関する誤りが最終試験には見られたのである。これは仮名漢字変換システムの悪い点か、良い点かわからないが、誤った活用形を「ひらがな」で入力した場合、変換がおかしいため、誤りに気づくチャンスが与えられるのであろう。しかし、最終試験の際には、手書きで行うため、仮名漢字変換システムの手助けがない。そのため、試験になって、あまりの出来なさ振りに驚いてしまった。もちろん、「一緒厳命(韓国人学生)」「遊ぶ時があるにつけないにつけ(ロシア人学生)」のように仮名漢字システムのチェックをすり抜けてしまうような入力もあるが、どうにか下のレベルから上がってきたような日本語力が弱い学生には、メールでの宿題提出というのは適していない形態なのかも知れない。メールで送られてくる宿題のチェックで怪しいと感じた学生には、手書きの宿題に変える等の方策も考えられるが、クラスには少数で、学生は手書きとワープロ書きのどちらが多いのかや、宿題の処理の複雑化を考えた時、二の足を踏んでしまう。これは日本語力の弱い学生には、いい面もあり、悪い面もある。今後、さらに試行錯誤を繰り返し、表現力の向上と文法力の強化のための工夫をしていきたいと思っている。